

| | |
|------------------|---|
| Title | 『明解国語辞典』論：「序」の考察 |
| Sub Title | |
| Author | 武藤, 康史(Muto, Yasushi) |
| Publisher | 慶應義塾大学国文学研究室 |
| Publication year | 1993 |
| Jtitle | 三田國文 No.18 (1993. 6) ,p.65- 80 |
| JaLC DOI | 10.14991/002.19930600-0065 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19930600-0065 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『明解国語辞典』論

——「序」の考察——

武藤 康史

- 一、これまでの評価
- 二、書誌
- 三、概要
- 四、日本語の「海外進出」との関係
- 五、見出し語の排列と表記法
- 六、「基礎日本語」その他
- 七、外来語
- 八、戦争による新語
- 九、口語形の優先
- 十、アクセント

（刊年などは、1900年以降のものは西暦の下二桁で表示した。）

一、これまでの評価

『明解国語辞典』（三省堂、43年刊）についての研究はあまり進んでいない。

『国語学大辞典』（東京堂出版、80年）は『言海』『大日本国語辞典』『大言海』までは立項するが、『明解国語辞典』は見出しに立っていない。『明解日本語アクセント辞典』（58年）や『日本国語大辞典』（72―76年）は独立項目になっているので、刊行時期で区切ったわけではなさそうである。索引を引くと「金田

一京助」の項に言及があることはある。

『国語学研究事典』（明治書院、77年）では索引にもない。

『日本語百科大事典』（大修館書店、88年）の「辞書の歴史」の項には《太平洋戦争後から今日までは、『広辞苑』（岩波書店）に代表される中型辞典と、『明解国語辞典』に代表される小型国語辞典の群出と、大型辞典の『日本国語大辞典』（小学館）の誕生が特筆される》（飛田良文）とあり、《代表》であることは認められている。

前田富祺『国語語彙史研究』（明治書院、85年）の第四章「近代における国語語彙の研究」第二節「国語辞書をめぐって」は《その後、金田一京助の『明解国語辞典』『明解古語辞典』、新村出の『広辞苑』なども出てきているが、いずれも一般の使用を目的としたやや小型のものである》と述べ、《これらに対して、『日本国語大辞典』は現在考えられる範囲でもっとも優れた国語辞書であると言えよう》と転ずるが、規模も違い、刊行時期も離れた辞書を並べて『日本国語大辞典』の評価に向かうのはそぐわない感じもする。

『増補改訂 日本文学大辞典』別巻(新潮社、52年)の「辞書」の項(山田俊雄)には夙く次のように「明解国語辞典」を評価する記述があった(引用文中、()内の「同」は「昭和」)。

「広辞林」を継ぐものに新村出の「辞苑」(同十年)があつて、中型で一般向の、やゝ百科辞書的な広汎な語彙を含み、語数十六万と称する。又「言苑」(同十三年)も同じ著者の編で、教育用の簡易なもの標準となつた。小型のものには金沢庄三郎の「小辞林」(同三年)があつてひろく行はれたが、昭和十八年に出た金田一京助編「明解国語辞典」は、現代語を多く採録し、且つ各語の東京アクセントを附したもので、語数はさして多くないが小型辞書の一典型となつた。

『世界名著大事典』(平凡社)の「辞典・双書」の部(初版の八巻本では第六巻、61年刊。のち図版を加え、『世界名著大事典オリジナル新版』として巻立てを再編成して復刊、そのときは第13巻、87年刊)は「明解国語辞典」を独立項目とし、まとまつた記述をあたえていた(引用文は原文横書)。

明解国語辞典(1943) 金田一京助(1882~1971)編。編者は言語学者で、本書の編纂には金田一彦彦、見坊蒙紀、山田忠雄が協力している。現代語を中心にすえて、現代の言語生活に直接役だつべきことを目標において編修され、従来の国語辞典が学習用という用途のために多く採用していた古語をかなり捨てて、漢語、外来語を積極的に採り入れ、新造語、流行語、略語の類にも及んでいる。体例として新しい点は、表音式の見出しの表記を徹底的に行なつて、独特の音節表示をする。また、各語にアクセントを、本書特有

の記号によって与えて、アクセント辞典の用も兼ねさせている。語の意味の説明は、多く簡明ないいかえの域を出ないが、その用語の平明なことと、創意くふうに富む点は、良心的な態度の反映として評価されよう。ただし採用した項目が、必ずしも学術的な広範な語彙調査を前提したものとは思われなような、偏向がある。たとえば、趣味、スポーツなどの新語や外来語を大胆に採り入れた点。以上の長所短所を考え合わせると、その形がハンディな点とともに、本書は1943年(昭和18)初版、1952年改訂版を出したその時代においては、出色のものであつたことを指摘して大過ない。外国人が日本語の実用を学ぶ際にはことに重んじられよう。三省堂刊。(山田俊雄)

52年と61年に刊行された右の二点では(同じ筆者によるものものとは言え)ここまで詳しく書かれていたものが、その後の辞典類では受け継がれずに、むしろ比重の小さい扱いになっている。なぜなのか。辞書は何分にも商業出版物である。戦後、小型辞書の簇生する中、それらの元祖「明解国語辞典」が「新明解国語辞典」と名を変え、また「三省堂国語辞典」を派生させる形で今も強力に生き続けてほかの辞書と競争している状況があるため公正な評価がしにくい、というような因子が働いているのではあるまいか。また小型を含めて国語辞書の数は夥しく、相互の関係は錯綜しており、ちょうど多作すぎる小説家の個人全集が編まれにくく鳥瞰的な把握がしにくいというのに似た事情もあろうかと思う。いささかなりともその空白を埋めたく思い、筆を執つた次第だ。

〔追記〕『国史大辞典』第六卷（吉川弘文館、85年）の「辞書」の項（阪倉篤義）にも「昭和十年代に入って、現代語研究がようやく進展するとともに、はじめて真の現代語辞典と称すべきもの（たとえば、『明解国語辞典』、金田一京助編、昭和十八年）が編纂されるようになり、語釈の方法なども大いに進んだ」とあった。

二、書誌

『明解国語辞典』は43年5月10日に刊行された。架蔵の第八刷の奥付には次の刊記がある。

昭和十八年四月三十日 初版印刷
昭和十八年五月十日 初版発行
昭和二十年六月十日 八版印刷
昭和二十年六月二十日 八版発行
（五〇、〇〇〇部）

初刷は未見だが、見坊豪紀『辞書と日本語』（玉川大学出版部、77年）の『明解国語辞典』の由来一に「初刷りは昭和十八年五月十日に発行された。A6判で部数一〇万、定価四円であった。定価は翌年には五円に上がり、昭和二十年六月二十日発行の八刷りは一〇円になった」とある。初刷りが十万部、八刷りが五万部だということは、（かりに二刷以降の刷りごとの部数が同じだと仮定すると）二年間で四十五万部ということになる。

刊行日以外のところは次の通り。

明解国語辞典
（註）定価 金拾円

編者

查定番号六ノ二二〇智
金田一 京助

発行者

東京都神田区神田神保町二丁目一番地
三省堂出版株式会社
代表者 今井直一

印刷者

東京都蒲田区仲六郷二丁目五番地
株式会社 三省堂蒲田工場
代表者 中井清太郎
会員番号東京二三九

発行所

日本出版会会員番号第一四〇二八〇号
東京都神田区神保町二丁目一番地
三省堂出版株式会社

検印はなく、代りに「不許複製」と双行でしるしてある。奥付を囲む単辺の枠の上欄には横書きで、

出版会承認／う260307号
とある。下欄には横書きで、

配給元 東京都神田区淡路町二丁目九番地／日本出版配給統
制株式会社
とある。

判型はB6判、黒のクロス装（箱の有無は未確認）。背表紙には、

明解国語辞典 文学博士 金田一京助編 三省堂

とある。表紙には、

文学博士／金田一京助編／明解国語辞典
と右から左への横書きでしるされている。字は茶色のように

見えるが、『三省堂の百年』（三省堂、82年）所掲のカラー写真を見ると銀色のような。最初のほうの刷りだけ銀色だったのかもしれない。あるいは変色したのかもしれない。扉は、文学博士 金田一京助編／明解国語辞典／三省堂
目次はないが、次のような構成になっている。

| | |
|------------------------|----------|
| 「序」（金田一京助） | 2 ページ |
| 「凡例（本書の使ひかた）」 | 3 ページ |
| 「略語表（排列は五十音順）」 | 1 ページ |
| 「標準語アクセントの解説」（金田一春彦） | 19 ページ |
| 本文（あ〔吾〕くもれる〔埋れる〕） | 1090 ページ |
| 「常用略語表」（あ〔阿〕くわんたく〔湾拓〕） | 11 ページ |
| 「附録」（活用表） | 8 ページ |

三、概要

『明解国語辞典』は見坊豪紀がほぼ独力で作り上げた辞書である。見坊豪紀『辞書をつくる』（玉川大学出版部、76年）の「京助先生と私と父」（以下a）ならびに見坊豪紀『辞書と日本語』（同、77年）の『明解国語辞典』の由来（以下b））に書いてあることをまとめると、見坊豪紀の父、見坊田^た竊^お雄は金田一京助と同じ高等小学校・中学校の後輩だった。見坊豪紀は東京大学国文科に進んだが、指導教授は橋本進吉、言語学科の金田一京助の講義にも出席した。金田一京助は見坊田竊雄のことを憶えていた。

見坊豪紀は39年に東大を卒業、大学院に籍を置くことになった。見坊田竊雄は豪紀を連れて金田一京助に挨拶に行き、「せ

がれ」について何分のお願いを申し上げた」（a）。

その年の秋、金田一京助から、三省堂の国語辞書の仕事をやらないか、という話があった。三省堂の『小辞林』（28年）の「語釈を口語文に書き換え、必要な新項目を若干追加してほしい」（b）ということだった。三省堂の要求はこの二点だけだったが、見坊豪紀は《二週間ばかり検討と研究を重ねた末、大衆のための辞書、現代語本位の辞書という基本的な性格づけと具体案ができあがり、無事、会社の面接試験も通過した》（a）。後年、じつはこの仕事にはほかにも候補者がいて、その人は三省堂の面接で不合格になっていたと知らされたという（見坊豪紀直話）。金田一京助の推薦で即決、というわけではなく、三省堂として複数の候補者を面接した末ようやく見坊豪紀にめぐりあい、その説くところの新しい国語辞書をよしとして編纂を一任したのである。この《基本的な性格づけと具体案》もほとんど一人の考えだったと認められよう。

そして《昼夜兼行で一、一〇〇ページ分の原稿を書き上げたのが一三か月後であった》（b）。40年末ごろの脱稿ということになる。見坊豪紀（1914年11月20日生れ）の満二十五歳から二十六歳にかけての仕事であった。刊行までにそれから約二年半かかっているが、それは印刷工場が軍関係の仕事を優先的にさせられていたため、というのが主な理由らしい。また当時の下宿先は同潤会江戸川アパートだったとのこと（この二点、見坊豪紀直話）。建築史、文化史などの上で今日さまざまに見直されつつある同潤会アパートで国語辞書の革命が静かに進行したのであった。

できあがってみると、『小辞林』の語釈の口語訳と新項目の若干の追加、という当初の三省堂の要求を大きく超えるものとなった。項目だけを比べてみても（かなづかいの違いが影響しない一区間を任意に示す）、

『小辞林』（×は『明解』になし） 『明解国語辞典』（○は『小辞林』になし）

最愛 最愛

罪悪 罪悪

彩衣× 罪悪

災異 災異

在位 在位

齋院 齋院

細雨 細雨

彩雲 細雨

齋会× 彩雲

在營 在營

在役 在役

再縁 才媛

菜園 再縁

サイエンス 菜園

サイエンス サイエンス

のごとく、日常語を重視した綿密な入れ換えが見られる。語釈にしても、

かき「柿・*」（名）○【植】帯黄赤色なる大形の漿果を結ぶ

落葉喬木。○かきいろ。 【小辞林】

かき①「柿・*」（名）【植】柿科の落葉喬木。五月頃、帯黄色の花を開く。果実は食用・漢薬用、又渋を取る。木材は器具用。（*には柿の異体字がはいる）（『明解国語辞典』）

き・る「切」（自）①はなる。わかる。（断）。②つく。ため。③やぶる。さく。④へる。かく。

き・る「切」（他）①たつ。さく。（断・截）。②きずつく。あやむ。（斬）。③したむ。④さへぎる。⑤よこぎる。⑥尽くす。⑦限る。⑧両替をなす。

き・る①「切る」①（自下二）【文】↓きれる。二（他四）①刃物で・断つ（さく）。②きずつける。③水分を去る。④さへぎる。よこぎる。⑤限る。⑥（電話などを）途中でよす。⑦両替をする。⑧（トランプで）札をませあはせる。⑨（トランプで）切札を出す。⑩きびきび言ふ。「啖呵を」。⑪終へる。果す。

き・れる②「切れる」（自下二）①離れる。分れる。②尽きる。なくなる。③やぶれる。④へる。かける。⑤切ることができ。⑥切味がよい。⑦頭が働く。手腕が鋭い。⑧関係がなくなる。⑨切る（下二）。（以上二項『明解国語辞典』）

のごとく、単に口語訳しただけではないものが多く含まれている。まったく新しい国語辞典の誕生であった。

《企画、立案、交渉、執筆、校正その他を通じ、世なれぬ私は、ろくに京助先生にご報告もご相談もせず、独断専行、春彦さんにはアクセントをつけていただき、山田忠雄君には校閲、助言をたのむなど、勝手に事をはこんでしまった》（a）と見坊蒙紀

四、日本語の「海外進出」との関係

は明記している。《「京助先生は口をきいて下さっただけ」と軽く考えていたのだが、》後年、《「じつは、私も校正刷りを最後の一行まで見たが全然手を入れる必要がなかった」という意味としても、手は加えられていないのである。

『金田一春彦博士古稀記念論文集』第三卷（三省堂、84年）の金田一春彦「自筆年譜」にも、「27歳」の項に《五月、見坊豪紀君によって『明解国語辞典』の編集がはじまり、その発音・アクセントの部を委嘱されたので、急に忙しくなった》とあり、京助の名はない。この《五月》とは40年の5月のことで、見坊豪紀単独の作業が半分以上過ぎた時期にあたる。

金田一京助編『辞海』（三省堂）の「序」（52年）を見ると《特に村井康男氏は、終始私を助け、十有余年の長き、ほとんどその最も壯んな時期を本書の編修にささげられたのであつて》というくだりがある。《私を助け》とあるように、金田一京助は自分がある程度手を下した場合ならそれとわかるように書く人だった。しかし『明解国語辞典』の「序」にはそのように示唆する表現は皆無である。「私」の二字もない。この「序」は、見坊豪紀が発案し、みずから実践した新しい辞書編纂法を金田一京助が真つ先に批評し、解説した文章、と見たほうがいいだろう。

辞書について考える際には収録されている語の一々について見てゆくのが本道であろうが、本稿では手始めに「序」のすべてを区切って掲げ、そこから読み取りうる理念や時代背景をたどる、という進め方を以下にしてみたい。

国運の栄える所、国語が今や大東亜の共用語たらんとして居る。簡明適切な国語辞典の必要はいつの代にも感ぜられることながら、今日ほど切実なことは曾てない。明解国語辞典は現代に生きる一般社会人の参考用、学生の学習用として編まれた実用辞書ではあるが、又以て、聊か新時代のこの要求に應じることが出来よう。

このように時世粧を意識した書き方は国語辞書の序文に珍しいことではない。時流というようなものをやや大袈裟に受け止め、要約する——辞書の序文はしばしばそういう場である（以下、この項の傍点は引用者）。

金沢庄三郎編『辞林』（三省堂、11年4月8日改訂版第十八版）の「緒言」には《明治の昭代、文物燦然として學術の興隆実に前代未聞なるに際し、国語學界の事業独り之に伴はざる憾あり》とあつた。

大町桂月監修、文明堂編輯部編『國語ことばの林』（立川文明堂、22年2月5日刊）の「はしがき」は《大正の昭代、文華燦然として、文芸の発展前代未聞と称す、宜なるかな、普通教育の肥料とも謂つべき辞書の刊行、亦た前代未聞の盛況を呈せるをや》で始まっていた。

『新選国語辞典 改訂新版』（小学館）に載っていた初版時の「編者のことば」（昭和三十四年八月一日）付、金田一京助・佐伯

梅友)は《今日、の、民主的、な、社会、では、ことばによる通じあひという、ことが、きわめて、だいじな、ことになつて、きました》で始まつていた。

そして『明解国語辞典』の掲げる合言葉は「大東亜の共用語」である。それがこの時期の、言わば俗耳に入り易い日本語観の一つであつたらう。イ・ヨンスク「保科孝一と言語政策」(『文学』89年5月号)はこの時期について次のように述べる。

平井昌夫氏によれば、「昭和十一、十二年ごろから論ぜられるはじめた日本語の海外進出についての問題は、昭和十四年になると、にわかに盛んになつた」(『国語国字問題の歴史』、三二二頁)。じつ、その頃からジャーナリズムは、日本語の「海外進出」に関する特集をさかんに編み、また政府官庁、民間団体が一斉に、日本語教本の作成、基本語彙表の確立、日本語教師養成などにとりくみはじめた。一九三九年六月には、文部省による第一回国語対策委員会が開かれる。また一九四〇年十一月には文部省図書局内に国語課が新設され、同十二月には興亜院と文部省の援助で日本語教育振興会が設立されるなど、その動きはあわただしかった。

『明解国語辞典』が当時の日本語の「海外進出」にどの程度具体的に寄与したかについては確証を得ていない。見坊豪紀が『明解国語辞典』に関して書いた文章の中にもそれにふれたものは見出せない。しかし『明解国語辞典』における見出し語の純表音式などの特色は占領地での日本語教育などに資するところが大きかつたはずであり、そういう時代背景があつたから新機軸が受け入れられ易かつた、という見方もできよう。

五、見出し語の排列と表記法

本書は、三つの根本方針に従つて編まれた。第一に引きやすいこと。第二に分りやすいこと。第三に現代的なこと。第一に引きやすくするために、見出し語の排列は五十音順とし、又その表記法は音韻式とし、長音符(ー)の代りに該当する母音字を以てした(凡例参照)。

排列を五十音順にするとわざわざ断っているが、山田忠雄『近代国語辞書の歩み その模倣と創意』(三省堂、81年)によれば《イロハ引の国語辞書も、言海 刊行以前・以後を問わず一般には行われていたのである》という。この本で挙げられているイロハ引の辞書のうち最も新しいものは28年刊の『昭いろは字典』(加藤伴之編、大文館書店)である。架蔵する『和語から現代語の辞典』(英文大阪毎日学習号編輯局、大阪出版社)もイロハ引だが、24年7月15日初版、30年7月10日百十版となつていよう。つい十数年前までこのような状況だったとすれば、あえてこう断るのも故なしとしない。

次いで見出し語を「音韻式」にすると謳っている。

見坊豪紀「ことばさまざまな出会い」(三省堂、83年)には《私の学生時代は、歴史的かなづかいの時代で、小学一年生から、ケフ(今日)、テフテフ(蝶蝶)、辛(居)マスで育つた。それでも、歴史的かなづかいはなかなか身につかず、まして、字音かなづかひに至つてはお手上げだった。中学校の読みがなテス

トでさえ、字音に限っては、表音式でよいことになっていった。／＼そのころの学生にとつて、『言海』『大日』は引きにくく、『広辞林』『広林』は引きやすかった。『広林』は、和語は歴史的かなづかいだが、漢語は表音的かなづかいだったからである」という回想があった(『大日』は『大日本国語辞典』)。

確かに金沢庄三郎編『広辞林』(三省堂、25年9月25日刊。今25年11月2日第四版から引く)の「凡例」は次のような条を含んでいる。

一、純粹の国語は歴史的仮字遣に拠れること勿論なれども、尚ほ其直下に細注を施して写音的仮字をも挿入せり。

〔略〕

一、本書の語彙中に出でたる漢字音は古今を通じて總て写音的仮字遣に拠れり、これ本書の一大特色にして、其理由とするとところは、現代の社会に於て字音仮字遣の実用は極めて稀なるのみならず、若しこれに従ふときは語辭の檢出甚しく不便にして、辭書の天職は半ばこれを没却すべき弊あればなり、されどなほこの古仮字遣をも一々其下に注記して一挙兩得の便法を採り、語釈中に出でたる漢字も亦總て正確なる字音仮字遣に拠れり。

字音かなづかいなどを見出しに使つては《甚しく不便》で《辭書の天職》を《没却》してしまふ、という先行辭書への明白な批判意識のもとに《写音的》かなづかいが採用されたのであった。

『広辞林』は漢語のみが表音的かなづかいだったが、これに続く『辞苑』(博文館、35年2月5日刊。今38年4月26日第百八十

二版を見る)は和語も表音的かなづかいで見出しにした。「自序」に《索出の方法は、大要、表音式に由り、その直下に旧来の仮名遣を註記した》とある。「井戸」は「いと」、「言う」は「ゆう」、「ひざまづく」は「ひざまずく」、「上京」は「じょうきょう」、「憤る」は「いきどおる」、「縮む」は「ちぢむ」で見出しに立つ。

これは24年12月24日に臨時国語調査会で可決された「仮名遣改定案」とほとんど同じである。違ふのは「氷」「通る」を「仮名遣改定案」では「こおり」「とおる」とするところ、「辞苑」では「こおり」「とおる」としている点くらいであろう(ただし「仮名遣改定案」は31年5月8日に修正案が発表され、「縮む」は「ちぢむ」になった。以上、かなづかいの変遷については『国語国字教育総覧』(国語教育研究会、69年)による)。

『辞苑』よりも早く出た藤村作編『増新辞典』(至文堂、29年4月18日刊。35年2月5日増補刊)の「凡例」には《本書の見出語はすべて表音のままで表はし、これを五十音順に排列した》《本書の見出語に採用した表音的仮名遣は文部省仮名遣改正案によつた》と明記してある(「縮む」は「ちぢむ」)。

「仮名遣改定案」が辭書の世界ではかなり普及していたことがわかる。もちろんそれは辭書の中ばかりではない。『国語文化講座』第一卷『国語問題篇』(朝日新聞社、41年刊)所収の石黒修「国語問題の展望」には《かな遣の改訂の運動も大部分古くからあるが、その改定案としてやかましく論議され、今日既に一部の人々に使はれてゐるものは、昭和六年五月、臨時国語調査会が発表した「仮名遣改定案」である》という一文が見える(傍

点は原文のまま。《大部分》は大部分の誤りであろう。ここで言われている「仮名遣改定案」は修正案のこと。実際、この『国語文化講座』（全六巻）の中には、表音的かなづかいで書き、末尾に（仮名遣は文部省臨時国語調査会案による）と断っている文章がいくつがある。

『辞苑』と同じころ出た『大辞典』（平凡社、34—36年）は「凡例」に《見出しは総て表音式である》と謳い、「憤る」は「イキドール」、「上京」は「ジョーキョー」で見出しになっている。字音語の長音を「ー」で表す点は1900年8月21日に公布された小学校令施行規則のかなづかい——いわゆる「棒引きかなづかい」と同じである（これは字音語のみかなづかいだった）。また山田忠雄『近代国語辞書の歩み その模倣と創意』によれば16年3月刊の『横引国語辞典』は「オーウ（覆被）」「オトート（弟）」「ゼンレー（前例）」といった見出しになっており、そして大町桂月撰『イヌサ国語辞典』（日進堂、23年4月刊）では「あるこうる」「あんちもにい」「チャウチブス」「あいきよー（愛嬌）」「あおによーぼー」「あかんぼー」など見出しに（歴史的かなづかい・現代かなづかいが混然として登場する）という。

このような流れの中で『明解国語辞典』の獨創性はどこにあったか。他とはつきり異なるのは「上京」を「じょきよお」と「経営」を「けえええ」とするような表記である。『大辞典』は「上京」は「ジョーキョー」だが「経営」は「ケイエイ」だった。長音符号を使うわりにはこういう点が不徹底だったとも言えよう。『明解国語辞典』の「凡例」では《本書の見出語の表記法は徹底的に表音式である》と宣言し、せえめえ（生命）・かれえ（鱈）・

めえ（姪）・レエル（レール）・こおこお（港口）・おおぎ（扇）・おお（文語の「追ふ」）。口語の「追ふ」は「おう」で見出しに立つ）・おおい（多い）・オオル（オール）・じしん（地震）・もず（百舌）・ラジオ（ラヂオ）などを例に挙げている。

この表記法は金田一春彦の発案であるという。『三省堂ぶつくれつと』102号（93年3月）の金田一春彦「見坊君を偲ぶ」に《当時、私は先輩格として、いろいろ相談を受けた。私は引きやすい辞典にしようというなら徹底的に発音引きにしたらどうだろうと言った》とある。竹林滋ほか編『世界の辞書』（研究社、92年）の中の金田一春彦「国語辞典」（講演記録）にも同じ趣旨の発言が見える。

六、「基礎日本語」その他

第二に分りやすくするために、次の諸点に考慮を用ひた。

一、解釈の文を究極にまで平易化する事により、基礎日本語、又は国語の平易化の実践に対して一つの示唆を与へると共に、従来の辞書の文語・口語の混用、同意語による無意義な言換へを一掃した。

基礎日本語というものを最初に作ったのは土居光知である。土居光知『基礎日本語』（六星館、33年。34年刊のその普及版）によって引く）は千語の「基礎日本語表」を掲げている。「端書き」に《この基礎日本語は主として次の五つの目的を以つて考案されたのであります》とあり、その一つとして（傍線は原文）、

二、朝鮮や台湾の人々に日本語を教へることが非常にむづかしいといはれて居ります。これから満洲でも日本語を教へることが必要になりませう。その時自然のままの、整理されない、日本語を以つてするならばまた失敗するのではないかと心配されます。整理され、記憶することがたやすくされた基礎日本語を以つてしたならば、成功することができて、日本の人々とその場所に生れた人々とが直接に話もできるやうになり、心と心との親しい了解もできるかと思ひます。と明言している。

吉田澄夫・井之口有一編『明治国語問題諸案集成』語彙・用語・辞典（風間書房、72年）の「語彙編」を見ると、この「基礎日本語」より早く澤柳政太郎ほかによる「児童語彙の研究」（成城学校研究叢書）第一編、19年5月）があった。小学一年生二十五人の知っている語彙を一人一人に質問してまとめたもので（平均四千語だった）、この研究結果によって『児童の言語の力に適合したる国語教育を行ふべき一の根拠となすことが出来る』と効用を挙げている。しかしこの方面に目的を絞つた語彙調査は後続を見ず、次に登場したのがこの「基礎日本語」だった。『諸案集成』によればこの翌年（34年）には南滿洲教育会教科書編輯部が別の「基礎日本語」の調査に着手した。また『国語文化講座』第一巻『国語問題篇』の「国語問題年表」には38年3月に『国語協会、内閣から補助を得、基礎日本語の調査委員会を設置（十日）』とある。6月には垣内松三『基本語彙学』（上）が刊行された（下巻は出なかつたらしい）。40年1月には国際文化振興会が基本語彙の選定に着手した。

そのような趨勢の中で序文は書かれていた。見坊蒙紀が『基礎日本語』とか『国語の平易化』とかを意識したかどうかは別として、語釈の平易な書き方はただちに言わば政治的な価値を付与されたのであった。

次に『従来の辞書の文語・口語の混用』という指摘がある。『大日本国語辞典』（15—19年）、『大言海』（32—35年）などの語釈は文語体だったが、『辞苑』（博文館、35年2月5日刊、今41年9月25日第三百六十二版による）は凡例に『語彙の説明は、簡明平易を旨とし、口語体を用ひ』とあえて断つている。主要な国語辞書で語釈に口語体を用いた恐らく初めである。次いで姉妹篇『言苑』（博文館、38年）もそれに倣つている。金田一京助はこれらの中にも文語体を混用している部分があると指摘しているようである。確かに『辞苑』の中にも、

だて「伊達」(名)〔中略〕——の薄着(句)だてを主とする為、姿の見よからんことのみを欲して、寒空にわざと薄着をすること。

のように文語体のまじつた記述がないわけではないが、『言苑』では前半が『だてのために姿を見よくしようとして』に変わつている。金田一京助が言いたかったのは、あるいは単に、口語の文体でも佻屈な表現が多々残つていた、ということなのかもしれない。あるいは語釈を口語でしながら見出し語は文語形優先で立てる、というような姿勢を一括りにしての指摘であつたかもしれない。

二、専門語の説明については、特に注意して説明を親切・

丁寧・平易にし、われわれ日本人の生活にそれらがどんな関係を持つかについてもいちいち注意し、説明中の外来語にも、すべて原語を附記して紙面を惜しまなかつた原文は「た」から次行」。又説明に用ひた術語・難解な言葉は見出語として出すやうにした。

三、むづかしいと思はれる漢字には仮名を添へ、更に仮名の読みちがひをしないやうに注意を与え、直ちに誰でも正しい読みかたが分るやうにした。

四、随所に、用例を掲げ、対語・反意語を示し、又ほとんどすべての語に、同意語を併せしめて、理解を深くし、かつ確かにすることが出来るやうにした。

二に《説明中の外来語にも、すべて原語を附記して》とある。確かに「アルゼンチン」の語釈《【地】南アメリカの南部にある共和国。首都ブエノスアイレス(Buenos Aires)。亜(国)》のように、語釈の中に原語を示すことはあるが、これは国名など一部の語の語釈に限られる。《すべて》ではない。

三に言うのは要するに語釈の中でも漢字のよみがなを示した、ということである。たとえば「愛人」に《(名) 愛する人。恋人(コヒビト)》のようによみを丸がっこに入れて後置している。このような措置は『辞苑』や『言苑』にもないことはないが、『明解国語辞典』にそれが豊富なことは一見してわかる。『言苑』の「愛人」の語釈も《(名) かはいく思ふ人。恋人。》であるが、よみは示していない。

四のうち対語・反意語については「凡例」で種々の記号の説

明がある。↓(同意語)、↑(省略形)、↓(反意語)などである。たとえば「上」の語釈に《(名) ①高い・所(地位) (↑下) ②おもて(↓裏)》という風に使ってある(④までであるが、略)。「言苑」では語釈自体は似ているが《①高い所。(下の対) ②おもて。(裏の対)》という書き方で、このような記号の使用においても「明解国語辞典」が先鞭をつけていたことが窺われる。

第三に現代的にするために、語彙の撰定に十分留意した。

一、現代に役立つ実用辞書であらうとする限り、語彙撰定の標準は、当然現代の標準的口語でなければならぬ。本書は語彙の基準を現代の標準的口語におくと共に、緊要・普通な古語・方言も注意深くとりあげることになつた。

《現代の標準的口語》を採った、という点については後段さらに具体的な記述があるのでそこで述べたい。《緊要・普通な古語・方言》とあるが、《緊要》な《古語》とは勅語などに使われる語彙のことであろう。新村出編『言苑』(博文館、38年2月19日刊。今38年5月10日三十版による)の「序文」には次のようなくだりがある。

それ斯くの如く、現代語の編入に遺漏のないやうに意を用ひたとは云ひながら、固より古典語乃至近代語の集載を怠らなかつたことは勿論のことであり、殊に国民の服膺すべき勅語・詔書中に拝見される所の尊き御言葉は、殆ど網羅することに格段の心を砕いたこと、これ亦申すまでもない。

現代のことはたくさん入れたと揚言するかたわら、勅語や詔書のことばもちゃんと収録しましたと言ふれるという展開がよく似ている。

七、外来語

二、なほ、本書は一般的な外来語は勿論のこと、最近用ひられる特殊な外来語・料理・服飾・美容に関する外来語もできるだけ多く採録することに努めた。

最近、時代の風潮として外来語の使用を廃止し、又外来語のかはりにその訳語を使用する傾向が一部に見える。然し本書は原則としてこれらの現象を静観し、暫く事態の推移を注視しつつ、本書編纂当時における国語の現実相を忠実に記録しようとした。

《一般的な外来語》と対比させて《料理・服飾・美容に関する外来語》を挙げているのが注目される。日常生活でよく用いられながら辞書に載りにくい、という観察が働いているのではないか。

改行後、いささか持つて回った表現となる。弁解しているようでもあり、先手を打ったようでもある。この背景を考えたい。「序」の書かれた日付は《昭和十七年八月二十五日》であるが、この前の年に荒川惣兵衛『外来語辞典』（富山房、41年6月10日刊）が出ている。当人の序の前に六人の序が載せられているが、そのうちの一人、市河三喜はこの辞書の出版を祝福したのち、

次のように書いている（末尾には《昭和十六年二月》の日付がある）。

今や時勢は外来の勢力に対して極度の反撥を示し、外来語の如きも悉く之を駆逐せんとする風潮が一部に見られるが、しかし伸び行く帝国の発展に伴ひ、他国民他国語との交渉が繁くなればなる程、外来語の数の殖えるのは阻止し難い勢である。その中で不必要なものは自ら姿を消し必要なものだけが残る事は本辞書のページを繰りひろげても察せられることであらう。最も善き国語は最も純粹な国語ではなくして、あらゆる場合に最も適確に我々の思想を表現して伝達する国語である。その為に外来語を使用する必要のある時は何も躊躇するには及ばない。より善き代用語の見付かる迄は、又は見付からない場合は、外来語を採つてこれを我が物として駆使すべきであり、これが又我々国語の又我々国民の特色である。

さは云へ今日迄外来語を無批評に取入れた傾向は今後は是正されるであらう。国語界も今一大転換期に直面して居る。この時にこの辞書が現はれて今日迄の我々外国語の最も信頼すべき総記録を提供された事は、最も有意義な事であり、学界への一大寄与であると思ふ。著者に対しては尚統いて此方面への注意を怠らず、増補に増補を重ねて更に完成の域に進まれるやう熱望する次第である。

ここに引いたのは最後の二段落であるが、末尾近くの《此方面への注意》とは何のことであらうか。《学界への一大寄与》などのことではあるまい。わざとわかりにくく書いているように思われるのだが、要するに《今日迄外国語を無批評に取入れた

傾向は今後は是正されるであらう」と見なければならぬような国語の《一大転換期》であることを《此方面》と言っているのではなからうか。前の段落の初めで憂えていた、外来語を《駆逐せんとする風潮》なども含め、そういう世間の動きにはくれぐれも用心しろという意味合いで《此方面への注意を怠らず》と曖昧な言い方をしていると思われるのである。

『外来語辞典』が出た半年後、太平洋戦争が始まった。その次の年には外来語に対する風潮がますます偏頗になって来たようである。当時の「朝日新聞」を通覧してこんな記事を見つけた。42年5月1日夕刊2面「鉄箒」欄（今で言えば「窓」のような欄）「競争馬の外国名」（鈍刀生寄）は、競馬見物に行ったら馬の名前が《ゼバラツケン、ライアンズモア、スターサイレーン等々》であることに《驚いた》、《とうに日本的な勇ましい馬名がつけられるべきではないか。それが今もつて出来ないところ、なほ米英的のものが残つてゐるとしか思はれない》と八つ当たりしている。

6月12日夕刊2面「鉄箒」欄「敵国語襟章と学生」（泉谷彦奇）は《無敵海軍の予備将校を養成するわが高等商船学校の学生が、制服の襟につけてゐるNとEとは、航空科と機関科とに相当する英語の頭文字なのであり、東大の学生がつけてゐるJ、M、T、L、Sなどの襟章も、それ／＼法、医、工、文、理学部に当る英語の頭文字である。かうした事は、たとひ米英がわが盟邦であつたとしても国辱ものであるのに、まして彼らがわが国正面の敵である今日、開戦半歳なほ臆面もなく制服につけてゐるのは驚くべき恥知らずといはなければならぬ》と非難して

いる。

こんな論調が闊歩しているとき、同じ42年の8月に金田一京助は「序」を書いていたので。時流におもねらなければかりか、《時代の風潮として》という表現で外来語排斥論を批判しているとも感じられる。学問的には当然のことながら、気骨ある発言、あるいは勇氣ある発言と評することができるのではないか。

八、戦争による新語

三、以上のほかに、時代と共に一般化した、軍事・政治・経済・運動・工作・化学工業等に関する専門語をも注意して採録した。勿論、本書編纂完了後の新事態、なかんづく大東亜戦争関係の新語彙についても、できるかぎり追加補訂したのである。

四、更に、公文書等に用ひられる言葉は、その重要性に考慮した上で、なるべく採録することにした。

戦争が起きると新語や造語が飛躍的に増える。これは大東亜戦争に限ったことではなく、たとえば日清戦争のころ作られた辞書にも似たような例がある。山田忠雄『近代国語辞書の歩みその模倣と創意』によると、落合直文編『日本大辞典ことばの泉』（全五冊、1898—1899年）の「緒言」にはこんな一節があつた。

この書、編纂のために、一大繁多を来したるは、日清戦争の一事なり。かの戦争起り、台湾、わが領土となりしより、

種種の新しい言語の出で来れるは、千を以て数ふるも、数へつくしがたし。兵站部といふ語をきけば、そを取らざるべからず。戦利品といふ語を見れば、また、そをいれざるべからず。

『言苑』(38年)の序文も戦争にふれている。

之に加ふるに、現代語・新造語・最新外来語等須要なる語彙の採択に努めたばかりでなく、殊に最新皇軍武威の発揚と国力の海外発展とに基く語彙の成果を、本書の中に成るべく多く蒐集することを期した。軍事用語の豊富なるが如きは、その顕著な一例である。

同じ新村出の『言林』(全国書房、49年3月1日初版、49年9月25日三版)の「凡例」となると打って変つてこうなる(冒頭天ツキ)。

本辞典は、平和後の変転極まりない新日本の画期的国語辞典である。収める所の語彙およそ十五万、上は上代より下は最新昭和二十三年に至る。即ち上代・中古・近古・近世・現代諸文学の主要語彙の概要を網羅し、新たに俳句に関する季語の挿入を試み、現代語・新旧外来語一般、特に近年簇出せる新語の大概、天皇・国会・日本国憲法・新法令・新民法・新教育制度・新学術制度・社会・経済・労働・音楽等の問題に關しては、新情勢に即応せる斬新な内容を盛り、(後略)

このように戦争になればなつたで、また平和になればなつたで、辞書の序文は時代に《即応》するものであるが、こうして並べたとき、『明解国語辞典』の「序」は戦争に言及はしていてもかなり謙抑的で冷静な部類に属すると言えらると思う。

『辞苑』『言苑』になく、『明解国語辞典』にはある《大東亜戦争関係の新語彙》として、次のようなものが挙げられる。

うみわし②「海鷲」(名) 海軍航空部隊。海軍航空部隊の飛行機(乗組員)。

こおあ①「興亜」コウー(名) 白人の勢力に対してアジヤの民族が共同して亜細亜をさかんに、すること。

九、口語形の優先

本書は現代の標準的口語を中心としてゐる。従つて、動詞・形容詞・助動詞等の活用する語は、すべて口語形のもので解くが、その文語形をも洩れなく示し、一一それを標出したから、使用者は必要な語を何れの形でも求めることができるであらう。

ここは「一」の《現代の標準的口語》を《語彙撰定の基準》としたという総論に対し、「凡例」で説くべき各論の中の「項目を抽出し、あえて特記したという趣のところである。「凡例」ではさらに詳しく、動詞・形容詞・助動詞に分けて書いてある。まず《動詞は、若干の例外を除き口語形・文語形の両方を出した。但し解釈は口語形の方で行つた》とある(傍点および促音小書きは原文のまま)。たとえば「受く」は空見出し、「受ける」に語釈がある(『言苑』では「受ける」が空見出し、語釈は「受く」にある)。次に《形容詞は、口語形だけを出し、終に文語形を示した》とある。たとえば「早い」「嬉しい」があつて「早し」

「嬉し」はない(『言苑』では「早し」「嬉し」はあるが「早い」「嬉しい」はない)。最後に《助動詞は、例外なく口語形・文語形の両方を出した。但し解釈は口語形の方で行った》とある。たとえば「さす」「らる」は空見出し、「させる」「られる」に語釈がある(『言苑』では「させる」「られる」が空見出し、「さす」「らる」に語釈がある)。

十、アクセント

特に記しておきたいのはアクセントを示したことである。之は本書的一大特色とする所で、語彙の標準的口語中心、語数の豊富と相俟つて、些か小形辞書としての進歩を示すものである。

最後に、本書の編纂並びに校正は、文学士見坊蒙紀氏の献身的努力に負ふことを明記して深厚の感謝を表す。尚文学士山田忠雄氏の有効適切なる補助のあつたことも銘記しなねばならない。またアクセントは、文学士金田一春彦氏をして標準東京アクセントを選考記入せしめたものであることを附記する。

昭和十七年八月二十五日

金田一京助識

『日本語百科大事典』の「日本語に関する辞書」の項では、明治以降、アクセントを付けた辞書として、

山田美妙『日本大辞書』(1892—93)

神保格・常深千里『国語発音アクセント辞典』(32)
『大辞典』(平凡社、34—36年)

日本放送協会編『日本語アクセント辞典』(43年、51年(43年版の改訂版だが書名は同じ))

の次に『明解国語辞典』を挙げている(ただし刊年を44年と誤記)。アクセントを付けた辞典はこれがすべてではないが、一般的な国語辞書としては『明解国語辞典』がほとんど初めてと言つていい。①②③…と番号でアクセントを示す方式も『明解国語辞典』が最初で、金田一春彦の発案だった。竹林滋ほか編『世界の辞書』の金田一春彦『国語辞典』(講演記録)に次の述懐がある。

アクセントを載せた字引は、明治時代に山田美妙が著わした『日本大辞書』というものがありません。(略)それを除けば、アクセントを載せた一般の字引は、私が作った『明解国語辞典』が一番古いもので、漢字を宛てた下にアクセントの符号をつけました。アクセントの符号というのは、私がこの字引を作る以前は、高く発音される文字の横に線を引いたものです。やま(山)、あめ(雨)というように。ところが、これは誤植のもとになるんです。しかも、日本語にはアクセントが2種類ある言葉があります。「熊」という言葉がありますが、普通私たちはクマと言いますが、皆さんはクマとおっしゃる人が多いでしょう。そういう場合は、どこに線を引いていいか迷うんです。それを考えまして、私は、アクセントを、どの音から下るか、音を初めから数えて、「雨」はアのところから下るから①とつけた。「山」は、次の助詞のところを下ると

考えて②とつけました。「風」のようなものは、助詞がついても、まだ下らないというわけで①とつけました。「略今、世間では私の方式が一般的になってしまつて、『大辞林』などの方式もそれです。『明解国語辞典』とは私は3年前に縁を切りました。」

金田一京助は《語彙の標準的口語中心、語数の豊富と相俟つて》とは言いながら、アクセントを《本書の一大特色》と筆頭に挙げてゐる。このあたりには子息の領分に比重を置こうとする父性愛を感じぬでもない。

なお、『明解国語辞典』という書名は山田忠雄の発案であつた。見坊豪紀「ことば さまざまな出会い」(三省堂、83年)の「ことばのアルバム」に《提唱者は《山田忠雄君だつた》》と書いてある。

本稿では「序」だけを扱つたが、さらに一つ一つのことばについて続稿で検討したい。

『明解国語辞典』に関する文献(本稿「一、これまでの評価」に挙げたものは除く)

金田一春彦「国語辞典」(竹林滋・千野栄一・東信行編『世界辞書』(研究社、92年)所収)

金田一春彦「見坊君を偲ぶ」(三省堂ぶつくれつと)102号(93年3月)

見坊豪紀「辞書と日本語」(玉川大学出版部、77年)

見坊豪紀「ことばの遊び学」(PHP研究所、80年)

見坊豪紀「ことば さまざまな出会い」(三省堂、83年)

見坊豪紀「日本語の用例採集法」(南雲堂、90年)

見坊豪紀「辞典編纂の実際」(『国語学会報』十一(48年10月23日発行)所載、国語学会編『復刻国語学会会報——昭和二十一年九月—昭和二十三年十月』(武蔵野書院、85年)に収録)

見坊豪紀「ことばの海をゆく」(朝日新聞社、76年)

見坊豪紀「辞書をつくる」(玉川大学出版部、76年)

見坊豪紀「日本語の辞書(2)」(『岩波講座日本語9 語彙と意味』(岩波書店、77年)所収)

武藤康史「明解国語辞典」から『三省堂国語辞典第四版』へ(『三省堂ぶつくれつと』98号(92年5月))

武藤康史「貧乏性」の語釈(『新潮』92年9月号)

山田忠雄「三代の辞書——国語辞書百年小史 改訂版」(三省堂、81年)

山田忠雄「近代国語辞書の歩み——その模倣と創意と——」(三省堂、81年)

山田忠雄「『新明解国語辞典』を語る(インタビュー)」(上・下)(『三省堂ぶつくれつと』83号(89年11月)・84号(90年1月))

和田實「日本語辞書のアクセント記号」(『金田一博士米寿記念論集』(三省堂、71年)所収)

(付記)見坊豪紀先生は92年10月21日に亡くなられた(享年七十七)。謹んで御冥福をお祈りする。

今年(93年)は『明解国語辞典』が刊行されてからちょうど五十年になる。

(むとう やすし)